

THE RAVE

written by HADEYA

1、朝の路地裏で

ヤクを買った……と言うか、買わざるを得なかった。これで買うのは五回目だ。キャッシュを手渡し、売人の元を去る。ヤクは私のハンドバッグに収まっている。

私には誰にも言えない秘密がある。

私は中毒者だ。それは秘密でない。私の秘密は——

パトカーが目の前の道路を横切った。心臓が跳ねる。手が震え、心臓がバクバクする。居ても立っても居られず、足早にその場を去る。

*

タイムカードを打刻した。銀行員として窓口立つ。夕方が訪れ、タイムカードを再び打刻する。そして帰路に着く。電車に乗り、駅前に出る。少し歩いたところで警官に声を掛けられた。

「落としましたよ」

ドキッとして、私はシドロモドロになった。バッグの中にマズい物が入っている。

警官は続けた。

「スマホ」

「あ、ああ、スマホね」

緊張した声、挙動不審。警官は一目で私の不審を見抜いた。

「この辺にお住まいですか？」

警官が尋ねる——職務質問。私は……走って逃げた。背後で警官が怒鳴る。全力で走り、駅前の公衆トイレに駆け込み、中から鍵を掛けた。

「開けなさい！ このドアを開けなさい！」

ドアを叩きながら警官が怒鳴る。私は頭の中が真っ白になった。私はハンドバッグから今朝、購入したヤクを取り出した。

2、夜の駅前で

開けろ！ 声がする。このドアを開けろ！ 何度も声がして、外からドアが激しく叩かれる。

私は震える手で左上腕に注射気を打った。〈ヤク〉が動脈に流れ込む。私が打った注射は——

「このドアを開けないか！」

——遂に時が来たのだ。覚醒の時が。

空になった注射器を落とした。瞳孔が開くのを感じる。鏡を見た。表情が豹変して行く。牙が生え、毛髪が抜け落ちて行く。警官の一団は、なおドアを叩いている……。

……結論から言えば、この後、私はモンスターに変身する。そんな映画があった。〈BLOOD RED SKY〉、Netflixの映画だ。

この作品はパクリなのかも知れない。そんな事はどうでも良い。肝心なのは自分の欲望に正直である事だ。肝心なのは——

作品の威力だ。

ドカン！ 正拳突きでドアを破壊した。トイレから出る〈私〉は醜悪なモンスターと化している。

「な、な……」

警官は言葉を失っている。突如、私は金切り声を上げた。突然の出来事に周囲は騒然としている。

モンスターが飛び掛かった。警官の喉笛を搔っ切る。その時の私の表情と言ったら……

怪物だ。見た事もない恐怖の怪物。

私は解放されたかった……恐怖から、あらゆるプレッシャーから。

警察にマークされる日々。警察に怯える日々。警察に——

私はトイレの天井に飛び乗った。再び金切り声を上げた。そこがどこかも分からずに。

私は叫んだ。叫んで叫んで、叫びまくった。依然、駅前は騒然としている。

私は叫び続けた。恐怖を動力に。解放を求め、叫び続けた。

*

この作品がパクリだと言うなら言うが良い。私は反駁するだろう。パクって、何が悪い？ お前の作品だって、何かのパクリじゃないか、と。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号
三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872